

一丁田遺跡3次

2017年

日田市教育委員会

序 文

この報告書は、当委員会が平成27年度に宅地造成工事に伴って実施した一丁田遺跡3次の発掘調査内容をまとめたものです。

調査では、弥生時代の後期や古墳時代の中頃の集落が発見され、本遺跡でこれまでに2回実施された調査の成果と合わせて、当時の集落の広がりを確認することができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や普及啓蒙、地元の歴史を知る手掛かりとして、また学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後に、調査に対するご理解やさまざまなご協力を賜りました関係者のみなさまに、また、作業にご尽力いただきました作業員のみなさまに、心より厚くお礼を申し上げます。

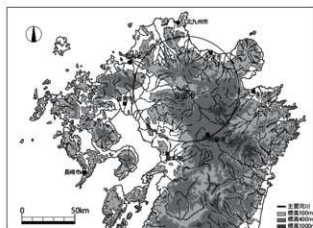
平成29年3月

日田市教育委員会

教育長 三笥 眞治郎

例 言

1. 本書は、宅地造成工事に先立ち、平成27年度に市教育委員会が実施した一丁田遺跡3次の発掘調査報告書である。
2. 調査は宅地造成工事に伴い、株式会社JAPAN・FUJITSU コーポレーションの委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては、事業者である株式会社JAPAN・FUJITSU コーポレーションのほか、施工業者である有限会社大蔵重機、また地元の方々にさまざまなご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
4. 発掘調査では、表土剥ぎ・遺構検出を除く、現場管理・遺構掘り下げ（B区のみ）、地形測量・メッシュ杭設置・平面遺構実測・個別遺構実測・土層実測・合成図作成及び遺構製図を発掘調査支援業務として、有限会社九州文化財リサーチに委託して実施し、本書ではその成果品を使用した。
5. 本書に掲載した空中写真は、九州航空株式会社に委託して撮影を実施し、その成果品を使用した。
6. 調査現場での写真撮影は、調査担当者が行った。
7. 本書に掲載した遺物実測・製図・写真撮影及び割付図は、雅企画有限会社に委託した成果品を使用した。
8. 挿図中の方位は第1～4・12・18図は真北、それ以外は磁北を示し、国土座標は世界測地系に基づいている。
9. 写真図版の遺物に付した数字番号は、挿図番号に対応する。
10. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
11. 本書の執筆・編集は、若杉が担当した。



日田市の位置



大分県の行政地図

本文目次

| | |
|--------------|----|
| I 調査の経過 | 1 |
| (1) 調査に至る経緯 | 1 |
| (2) 発掘作業の経過 | 2 |
| (3) 整理等作業の経過 | 2 |
| II 遺跡の位置と環境 | 3 |
| III 調査の内容 | 4 |
| (1) 調査の概要 | 4 |
| (2) A区の遺構と遺物 | 4 |
| (3) B区の遺構と遺物 | 11 |
| (4) C区の遺構と遺物 | 15 |
| IV 総括 | 16 |

挿図目次

| | | | |
|---------------------------------------|----|----------------------------------|------------------|
| 第1図 調査区位置図 (1/5,000) | 1 | 第11図 A区その他の出土遺物実測図 | |
| 第2図 調査区周辺地形図及び 調査区配置図 (1/800) | 1 | | (1/1・1/2・1/4) 10 |
| 第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000) | 3 | 第12図 B区遺構配置図 (1/150) | 11 |
| 第4図 A区遺構配置図 (1/150) | 4 | 第13図 B区1号竪穴建物 実測図 (1/80・1/40) | 11 |
| 第5図 A区1号竪穴建物実測図 (1/80・1/40) | 5 | 第14図 B区2～4号竪穴建物実測図 (1/80) | 12 |
| 第6図 A区2～7号竪穴建物実測図 (1/80) | 5 | 第15図 B区土坑実測図 (1/40) | 13 |
| 第7図 A区溝状遺構実測図 (1/60・1/40) | 7 | 第16図 B区3号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4) | 14 |
| 第8図 A区土坑実測図 (1/40) | 8 | 第17図 B区その他の出土遺物実測図 (1/4) | 14 |
| 第9図 A区1号竪穴建物出土遺物 実測図 (1) (1/4・1/6) | 9 | 第18図 C区全体図 (1/150) | 15 |
| 第10図 A区1号竪穴建物出土遺物 実測図 (2) (1/4) | 10 | 第19図 C区東壁土層実測図 (1/50) | 16 |
| | | 第20図 C区出土遺物実測図 (1/4) | 16 |

写真図版目次

| | |
|-------------------------|--------------------------|
| 写真図版1上 調査地周辺空中写真(南から) | 写真図版4 B区全景、B区1・2号竪穴建物 |
| 中 調査地全体写真(南東から) | 写真図版5 B区3号竪穴建物 |
| 下 調査地垂直写真(上が北) | B区南側竪穴建物・土坑、1～5号土坑 |
| 写真図版2 A区全景、A区1・5・6号竪穴建物 | 写真図版6 B区7・8号土坑、C区全景・トレンチ |
| 写真図版3 A区2～4・7号竪穴建物 | C区東壁土層 |
| A区1・2号溝状遺構 | 写真図版7・8 出土遺物 |
| 写真図版4 A区1～3号土坑 | |

本文写真目次

| | |
|----------|---|
| 写真1 作業風景 | 2 |
|----------|---|

表目次

| | |
|----------------|----|
| 第1表 出土土器観察表(1) | 17 |
| 第2表 出土土器観察表(2) | 18 |

1 調査の経過

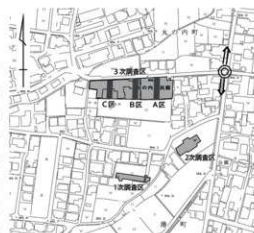
(1) 調査に至る経緯

平成27年3月5日付けで株式会社 JAPAN・FUJITSU コーポレーションより市教育委員会あてに、日田市丸ノ内町 531-2、531-4 について宅地造成工事に先立って埋蔵文化財の所在の有無に関する照会文書（事前審査番号 2014086）が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である一丁田遺跡に該当し、対象地の南側及び南東側約 100 m の場所では、これまでに 2 回にわたり発掘調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代前期の集落や古墳時代中期の鍛冶関連遺構が確認されており、当該地にも遺跡が存在する可能性が高いことが想定された。そのため、その取扱いについて協議が必要である旨の文書回答を行った。

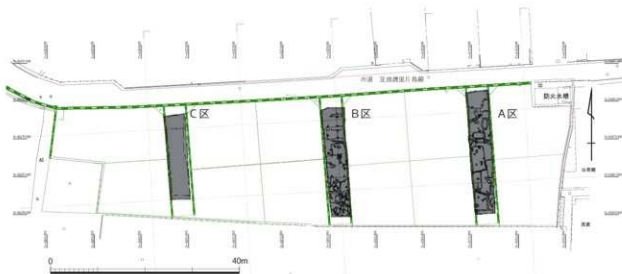
予備調査の依頼は 3 月 23 日に提出され、これを受けて、位置指定道路予定部分を対象に 3 月 25 日に重機と作業員による予備調査を実施した。その結果、現地表面下約 40 ～ 60 cm より、暗黄褐色ローム土の地山面とこれを掘り込んだ土坑や溝状遺構、ピット等を検出した。この予定地の造成は全面盛土工法であったが、造成地内の上下水道配管を伴う位置指定道路については、遺跡の保存が困難となる可能性があるため、発掘調査の実施に向けて事業者と協議を重ねた。同時に平成 27 年 3 月 24 日付けで文化財保護法第 93 条の届出を大分県教育委員会あてに進達、同年 4 月 6 日付けで発掘調査を実施する旨の通知があり、同年 4 月 17 日付けで事業者に伝達を行った。

その後、平成 27 年 6 月 11 日付けで発掘調査実施の依頼文を受け、同日付けで平成 27 年度から 29 年度の 3 カ年にわたる発掘調査から報告書印刷までの協定書、平成 27 年度発掘調査に係る委託契約を取り交わした。

翌平成 28 年度は、契約についての協議を行う時点で業務の進捗が当初の予定より早くなるが見込まれたため、同年度内に整理等作業に加え、報告書印刷までを 1 年前倒して実施する協定変更を 4 月 13 日付けで取り交わし、合わせて、同日付けで平成 28 年度の委託契約を締結した。



第1図 調査区位置図 (1/5,000)



第2図 調査地周辺地形図及び調査区配置図 (1/800)

なお、発掘調査から報告書印刷までに至る関係者は、次のとおりである（職名・所属名は当時のまま）。

平成 27 年度（発掘調査）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 三笠眞治郎（日田市教育委員会教育長）

調査統括 柴尾健二（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務 園田恭一郎（同課主幹（総括）／～平成 27 年 9 月）

古賀信一（同課主幹（総括）平成 27 年 10 月～）

行時桂子 渡邊隆行（以上、同課主査） 上原翔平（同課主任） 諫山温子（同課主任）

調査担当 若杉竜太（同課主査）

発掘作業員 赤尾ミチ子 伊藤治美 加藤祐一 五反田静子 小暮裕次 坂本隆 坂本由紀子 武氣直美

竹本和剛 谷口なつ子 長谷部修一 松下宣男

平成 28 年度（整理等作業、報告書作成・印刷）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 三笠眞治郎（日田市教育委員会教育長）

調査統括 池田寿生（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務 古賀信一（同課主幹（総括））行時桂子 渡邊隆行 長祐一郎（以上、同課主査）

上原翔平（同課主任）

整理作業及び報告書担当 若杉竜太（同課主査）

整理作業員 伊藤一美 高瀬真奈美 武石和美 立川幸子 用松操 吉田里美

（2）発掘作業の経過

現地での発掘調査の経過は次のとおりである。

- 6 月 16 日 重機による表土除去開始
- 6 月 17 日 作業員による A・B・C 区遺構検出開始
- 6 月 19 日 A・C 区の遺構掘り下げ開始
- 7 月 13 日 支援業務による B 区の遺構掘り下げ
A・B・C 区の遺構実測開始
- 7 月 24 日 空中写真撮影実施
- 7 月 28 日 A・B・C 区の遺構掘り下げ、遺構実測終了
- 7 月 31 日 器材整理・撤収、調査終了



写真 1 作業風景

（3）整理等作業の経過

出土遺物の整理作業は平成 28 年 5 月 17 日から 7 月 14 日まで行った。その後 9 月 13 日から 11 月 30 日の間、遺物実測・遺物写真撮影、割付等の委託業務、引き続き報告書の執筆・編集作業を実施し、印刷を行った。

出土遺物については、水洗、注記、接合後に、必要に応じて石膏による最低限の補強や復元を行っている。

II 遺跡の位置と環境

一丁田遺跡(1)は盆地中央部北側を西流する花月川とその支流の城内川に挟まれた沖積微高地面に位置する。標高は約84mを測り、遺跡帯は周辺より若干高いことから、中洲状の微高地を形成していたと考えられる。この一帯は、一丁田の小学名どおり明治期には広大な水田が広がっていたが、現在では宅地化が進む状況にある。

本遺跡の1次調査では弥生時代後期から古墳時代初頭、古墳時代後期、中世の集落、2次調査では弥生時代後期の遺物包含層や古墳時代中期の竪穴状遺構などが確認され、古墳時代中期の竪穴状遺構からは鉄錠が出土している。

次に遺跡東側には江戸時代に城下町として栄えた豆田町が所在し、その大部分が城下町遺跡(2)に含まれる。城下町遺跡の北側には西国筋郡代所であった永山布政所跡(3)、その背後に永山城跡・月隈横穴群(4)が作られた月隈山があり、さらに南側には私塾咸宜園跡(5)が所在するなど多くの近世の遺跡が残る。

次に周辺の遺跡を見てみると、北側の台地には古墳時代初頭の豪族居館が確認された小迫辻原遺跡(6)、弥生時代中期から後期の集落が確認された後迫遺跡などがある。台地裾部には弥生時代から古代の集落が確認された本村遺跡(7)や鍛冶屋廻り遺跡(8)が所在する。西側の台地には弥生期の大規模集落・特定集団墓が確認された吹上遺跡(9)が所在し、その崖面には北友田横穴墓群(10)が築造される。台地裾部には弥生時代から古代の集落が確認された今泉遺跡(11)が見られ、花月川を渡った対岸には弥生時代から中世の包含層、古墳時代の溝や竪穴建物が確認された郷四郎遺跡(12)が所在する。さらに、南側には古代の水田層が確認された日田条里遺跡四反畑地区(13-1)、古墳時代から中世の遺構が発見された日田条里遺跡千鉢地区(13-2)、縄文時代から古墳時代の包含層が確認された瀬ヶ本遺跡(14)が所在する。西側丘陵上には市内唯一の埴輪の出土が確認される中期の大型円墳である薬師堂山古墳(15)、円墳の丸尾神社古墳(16)などの古墳が築造される。丘陵裾の沖積地には古墳から古代の集落が確認された日田条里遺跡飛矢地区(13-3)、弥生時代の集落が確認された会所宮遺跡(17)、縄文時代から古代の集落と共に墨書土器が確認された大波羅遺跡(18)が所在する。中世大藏姓日田氏の居城であった大藏古城跡(19)の眼下には、15～16世紀の屋敷跡が広がる慈照山遺跡(20)、11～12世紀の建物跡が確認された日田条里遺跡上手地区(13-4)が見られる。

註) 各遺跡の内容について、それぞれの報告書を参照されたい。



第3図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

III 調査の内容

(1) 調査の概要

調査地は、城内川右岸と花月左岸の標高約84～85mの沖積微高地上に位置する。調査は事業予定地内の3か所に入る位置指定道路範囲を対象とし、東からA区・B区・C区とした。まず、遺構検出面まで重機により掘り下げ、人力で遺構検出作業を行った。

A区は現地表面の下位に暗茶色土の造成土、その下層で黄灰褐色粘質土や灰橙褐色砂質土の遺構検出面が確認された(第7図)。B区は、A区と同様に暗茶色土の造成土、その下位で黄灰褐色土の遺構検出面が確認された。C区では、宅地造成時の盛り土、その下位に1～2枚の水田層が堆積し、その下層で20～30cm大の礫を含んだ灰色砂礫土を検出した(第19図)。

なお、現地表面から検出面までの深さはA区は約40～60cm、B区は約40～50cm、C区は約60～100cmであった。

確認された遺構は、竪穴建物・溝状遺構・土坑・ピットである。詳細は各区の報告に譲るが、竪穴建物としているものでも、支柱穴やが跡・カマドなど、建物としての明確な要素を確認できなかったものもある。しかし近接して切り合っていることや、平面形が方形を呈すると考えられたことから、全て建物として報告する。

(2) A区の遺構と遺物(第4図 図版2)

A区では北端から約5mが擾乱を受けており、そこから南側で竪穴建物7軒、溝状遺構2条、土坑3基のほか、ピットが十数個確認された。

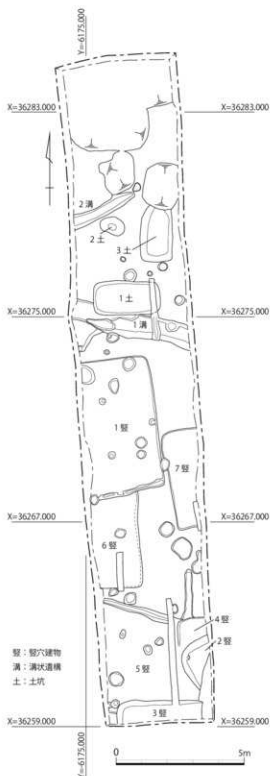
1. 竪穴建物

竪穴建物は調査区中央付近から南側で7軒確認された。

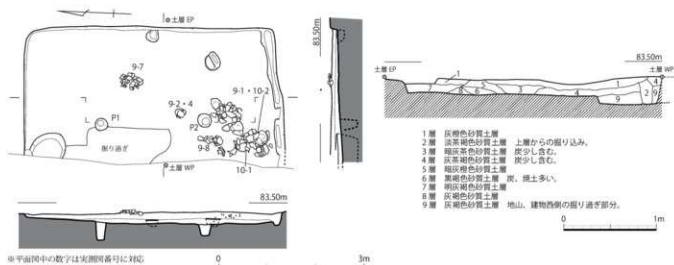
1号竪穴建物(第5図 図版2)

調査区の中央付近で確認され、6号竪穴建物を切る。西側は調査区外へ広がる。平面形は方形を呈し、調査区内で確認された規模は南北軸約5.4m、東西軸約2.8m、検出面からの深さは約10～20cmを測る。

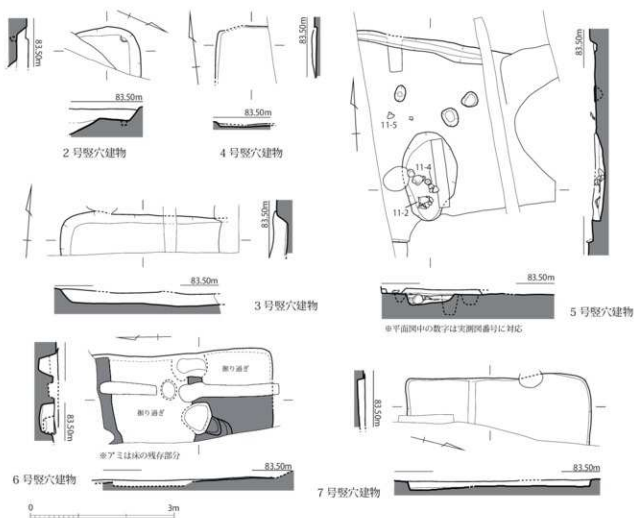
床面では、支柱穴と判断される2個のピット(P1・P2)が確認され、その位置関係から、4本柱の建物と推測される。この2個の支柱穴間の長さは約2.2m、P1・P2と東壁との長さが約2.0mであることから、西側の規模を推定すると東西方向の規模は約6.2mになると推測される。また、P1、P2の床面からの深さはそれぞれ約25、30cmを測る。



第4図 A区遺構配置図(1/150)



第5図 A区1号竪穴建物実測図 (1/80・土層 1/40)



第6図 A区2-7号竪穴建物実測図 (1/80)

また、床面中央付近では炭や焼土が多く検出されており、土層の堆積状況からも、床面直上の6層において、多くの炭や焼土を含んでいることが確認できた。それに対して、遺物の多くは床面から浮いた状態で出土していること、口縁部を打ち欠いた土器あることから、火を受けた後に何らかの祭祀行為が行われた可能性もある。

遺物は、弥生土器甕・壺・高坏など、多く出土した（第9・10図）。

2号竪穴建物（第6図 図版3）

調査区南側で確認され、4号竪穴建物を切る。東側は調査区外へ広がり、南側は攪乱により削平を受けている。平面形は方形を呈するものと思われ、調査区内で確認された規模は北壁側約1.4m、西壁側約1.5mで、検出面からの深さは約30～40cmを測る。床面において、ピットや壁周溝などは確認されなかった。

遺物は、弥生土器甕などが出土しているが、図示可能なものはなかった。

3号竪穴建物（第6図 図版3）

調査区の南端で確認され、5号竪穴建物を切る。南側は調査区外へ広がり、東側は攪乱により削平を受けている。平面形は方形を呈するものと思われ、調査区内で確認された規模は北壁側約3.0m、西壁側約0.8mで、検出面からの深さは約20～25cmを測る。床面において、ピットや壁周溝などは確認されなかった。

遺物は、弥生土器甕などが出土しているが、図示可能なものはなかった。

4号竪穴建物（第6図 図版3）

この建物は、調査区の南側で確認され、5号竪穴建物を切り、2号竪穴建物に切られる。平面形は方形を呈するものと思われるが、北西側のコーナー部分のみが確認され、東側は調査区外へ広がる。調査区内で確認された規模は北壁側約1.0m、西壁側約0.9mで、検出面からの深さは約10cmを測る。床面において、ピットや壁周溝などは確認されなかった。

遺物は、土師器甕などが出土している（第11図1）。

5号竪穴建物（第6図 図版2）

調査区の南側で確認され、南側を3号竪穴建物に、東側を2・4号竪穴建物に切られる。北壁及び南壁の一部が残っており、西側は調査区外へ広がる。平面形は方形を呈するものと思われる。規模は、南北軸が約4.3m、残存している北壁で約3.2m、検出面からの深さは約10cmを測る。床面においては、南側で屋内土坑が確認された。屋内土坑の規模は、長軸約1.9m、短軸約1.1m、床面からの深さは約20cmである。ピットも数個検出されたが、支柱穴と判断できるものはなかった。また、北壁には壁周溝を確認した。

遺物は屋内土坑を中心に、弥生土器甕・壺が出土している（第11図2～5）。

6号竪穴建物（第6図 図版2）

北側を1号竪穴建物に切られる。東壁及び南壁の一部が残っており、西側は調査区外へ広がる。平面形は方形を呈するものと思われる。調査区内で確認された規模は東壁側で約3.7m、南壁側で約1.6m、検出面からの深さは約10cmを測る。なお、床面を約2/3を掘り過ぎてしまったため、壁周溝を削った可能性がある。また、東壁際に屋内を検出した。このほか、ピットを数個検出したが、支柱穴と判断できるものはなかった。

遺物は、弥生土器甕などが出土しているが、図示可能なものはなかった。

7号竪穴建物（第6図 図版3）

1号竪穴建物の南東側で確認され、東側は調査区外へ広がる。平面形は方形を呈するものと思われる。規模は南北軸約3.7m、北壁側で約1.4m+a、検出面からの深さは約15cmを測る。床面には、ビット、壁周溝等は、確認されなかった。

遺物は弥生土器甕が出土している（第11図6）。

2. 溝状遺構

1号溝状遺構（第7図 図版3）

1号竪穴建物の北側で確認され、1号土坑に切られる。調査区を横断するように直線的に東西に延びる。主軸はN-79°-Wに取り、調査区内での長さは約2.5m、幅は約0.4～0.6mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さは約15cmを測る。

遺物は、弥生土器甕や土師器碗などが出土している（第11図7・8）。

2号溝状遺構（第7図 図版3）

調査区の北側で確認され、西側は調査区外へ伸びる。

主軸はS-73°-Wに取り、調査区内での長さは約4.6m、幅は約0.8～1.0mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さは約20cmを測る。

遺物は、弥生土器甕などが出土している（第11図9）。

3. 土坑

1号土坑（第8図 図版4）

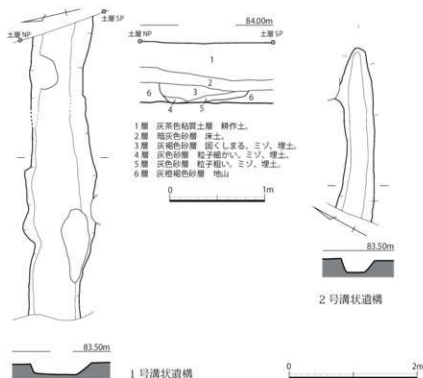
1号溝状遺構の北側で確認され、これに切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、床面は平坦ではぼ水平である。壁は急角度で立ち上がる。埋土は炭混じりの灰褐色土であった。規模は長軸約2.6m、短軸約1.3m、検出面からの深さは約20～25cmであった。

遺物は鉄鏝（第11図10）の他、弥生土器の甕・壺が出土したが、鉄鏝以外は図示可能なものはなかった。

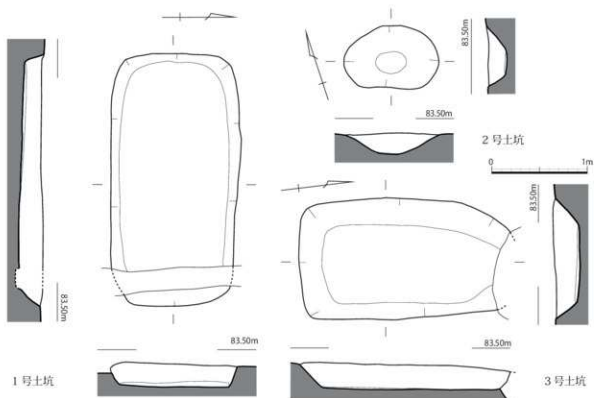
2号土坑（第8図 図版4）

2号溝状遺構の南側で確認された。平面形はやや歪な楕円形を呈し、床面は東及び北方向にやや傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭混じりの灰褐色土であった。規模は長軸約1.0m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約20cmであった。

遺物は寛永通宝（第11図11）の他、弥生土器の甕・壺が出土したが、寛永通宝以外は図示可能なものはなかった。



第7図 A区溝状遺構実測図 (1/60・土層 1/40)



第8図 A区土坑実測図 (1/40)

3号土坑 (第8図 図版4)

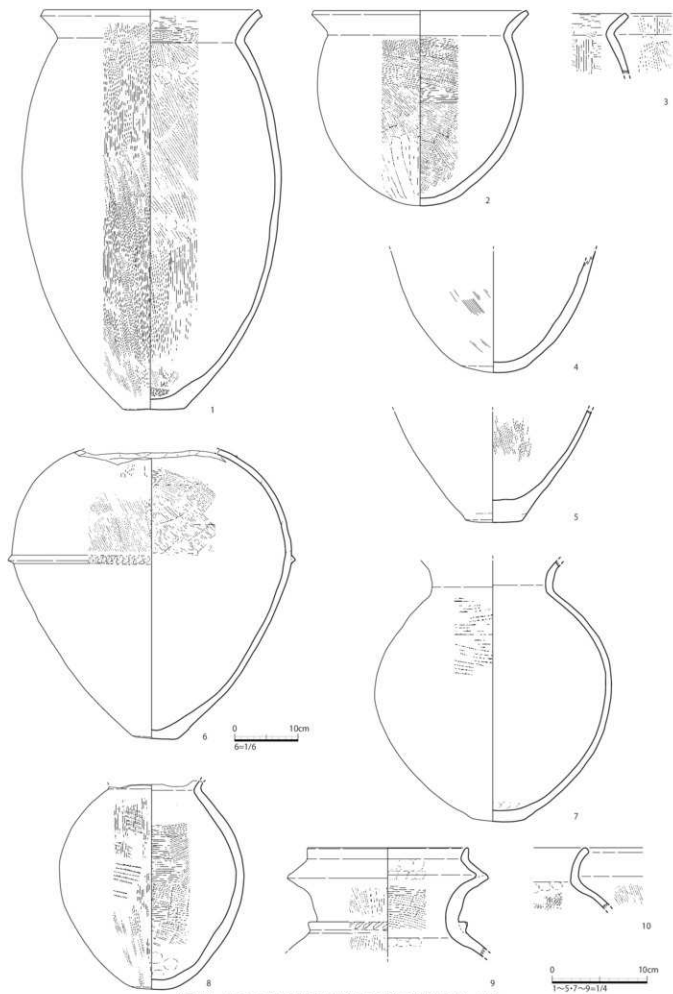
1号土坑の北側で確認された。平面形は隅丸長方形を呈するが、北側は攪乱坑による削平を受けている。床面は平坦で水平である。壁は急角度で立ち上がる。埋土は灰褐色土であった。規模は長軸約2.0m + aであるが、約2.3mになると推定される。また、短軸は約1.3mを測り、検出面からの深さは約20cmであった。

遺物は、弥生土器の甕が出土しているが、図示可能なものはなかった。

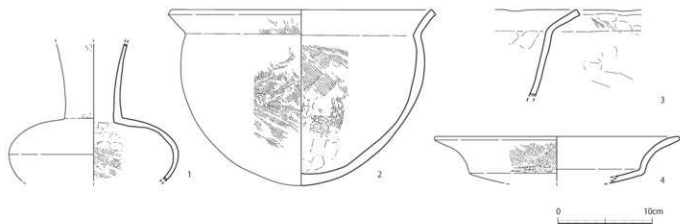
4. 出土遺物 (第9～11図 図版7・8)

A区での出土遺物は、1号竪穴建物からの弥生土器が最も多く、第9図6・8は、口縁を打ち欠いたものである。また、甕や壺、高坏も出土しており、セット関係を把握できる良好な資料と言える。なお、土器の詳細については第1表を参照されたい。

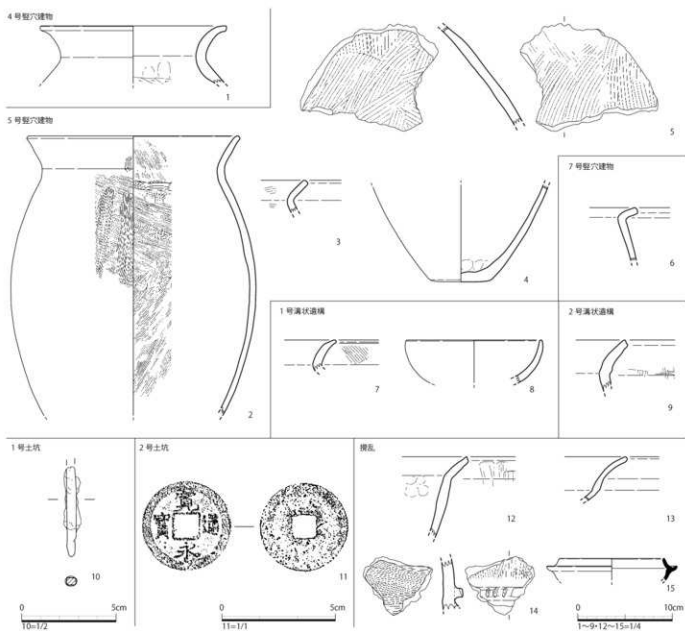
土器以外の遺物はここで記述する。第11図10は1号土坑出土の鉄鏃である。長頸鏃の某部と思われる、篋被部が残存しているかは、錆膨れのため、不明である。残存長5.5cm、重さ3.3gである。11は2号土坑出土の寛永通宝である。直径2.5cm、中央部には一辺6.5mmの方孔がある。重さは2.4gである。



第9图 A区1号竖穴建物出土遗物实测图(1) (1/4·1/6)



第10図 A区1号竪穴建物出土遺物実測図(2)(1/4)



第11図 A区その他の出土遺物実測図(1/1・1/2・1/4)

(3) B区の遺構と遺物 (第12図 図版4)

B区では調査区北端から約6mと中央付近が擾乱を受けており、この擾乱の間と南側でB区では、竪穴建物4軒、土坑8基、ピットが多数確認された。

1. 竪穴建物

B区での竪穴建物は、調査区中央付近で4軒確認された。1号竪穴建物では、カマドも確認されている。

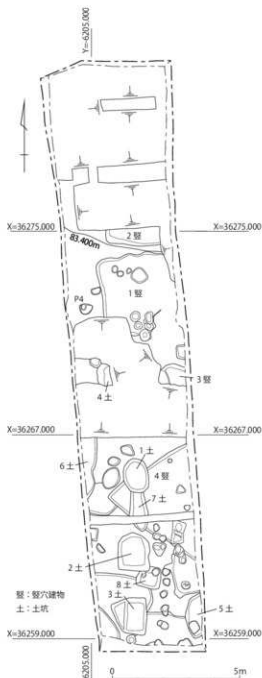
1号竪穴建物 (第13図 図版4)

調査区の中央部よりやや北側で確認された。東側は調査区外へ広がる。南側は擾乱により削平を受けており、北壁から西壁にかけてが残存し、南壁側はカマドのみが残っていた。平面形は方形を呈する。残存する規模は、北壁側で約2.6m + a、西壁で約2.1m + aであるが、カマドが南壁の中央にあるとすれば、北壁とカマドを結ぶ南北軸で約3.6m、北壁の長さは北壁中央から北西隅までが約1.4mであることから、約2.8mと推定できる。なお、検出面から床面までの深さは約10cmを測る。

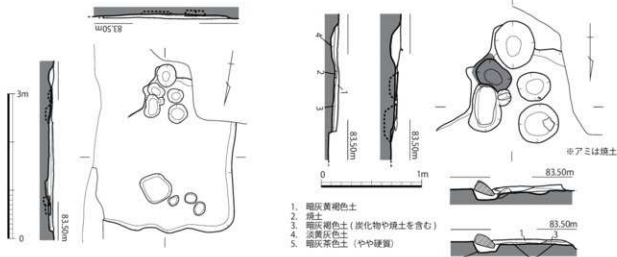
カマドは、煙道と突出部が見られる。袖は両方とも残存していないが、ピットが4個確認され、そのうち、左側手前のピットには袖石が残存していた。それ以外のピットについても中から石材片が確認されたものもあり、いずれも抜き取り痕と考えられる。また、カマドの左内側には火床面が確認された。カマドの規模は、奥壁から左袖が長さ50cm、右袖が長さ75cm、袖間の幅は手側で約60cm、煙道までを含めた長さは約100cmを測る。

このほか、床面はピットが数個検出されたが、主柱穴や屋内土坑と判断できるものはなかった。

遺物は土器器費が出土しているが、図示可能なものはなかった。



第12図 B区遺構配置図 (1/150)

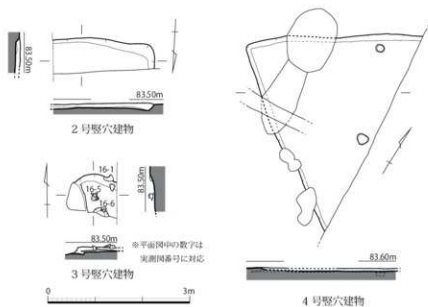


第13図 B区1号竪穴建物実測図 (1/80・カマド及び土層 1/40)

2号竪穴建物（第14図 図版4）

1号竪穴建物の北側で確認された。南西側のコーナー付近のみを残し、大部分が削平を受けている。確認された規模は、南壁側約2.0m、西壁側約0.5mで、検出面からの深さは約10cmを測る。床面において、ピットや壁周溝などは確認されなかった。

遺物は土師器裏が出土しているが、図示可能なものはなかった。



第14図 B区2～4号竪穴建物実測図（1/80）

3号竪穴建物（第14図 図版5）

調査区中央の東側で確認された。北西側のコーナー付近のみが確認さ

され、東側は調査区外に広がり、南側は擾乱を受けている。確認された規模は、北壁側約0.5m、西壁側約0.3mで、検出面からの深さは約10cmを測る。床面において、ピットや壁周溝などは確認されなかった。

遺物は土師器の甕、壺、高環などが出土している（第16図）。

4号竪穴建物（第14図 図版5）

調査区中央よりやや南側で確認され、1号土坑・7号土坑などに切られる。北西壁と南西壁が確認され、東側は調査区外へ広がる。確認された規模は、北西壁側約3.7m、南西壁側約4.3mで、検出面からの深さは約10cmを測る。床面において、ピットが数個確認されたが、主柱穴と判断できるものはなかった。このほか、壁周溝や屋内土坑などは確認されなかった。

遺物は土師器裏が出土しているが、図示可能なものはなかった。

2. 土坑

1号土坑（第15図 図版5）

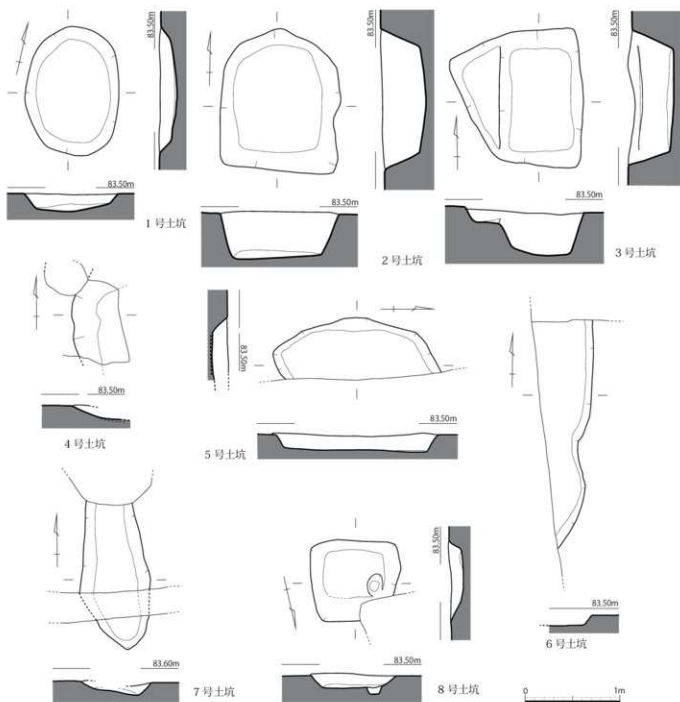
調査区中央よりやや南側で確認され、4号竪穴建物を切り、7号土坑に切られる。平面形は楕円形を呈し、床面は中央に向かって傾斜している。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は灰茶色土であった。規模は長軸約1.4m、短軸約1.0m、検出面からの深さは約15cmであった。

遺物は弥生土器の裏が出土しているが、図示可能なものはなかった。

2号土坑（第15図 図版5）

4号竪穴建物の南側で確認され、8号土坑を切る。平面形は北側がやや崩れた隅丸長方形を呈し、床面は平坦でほぼ水平である。壁は急角度で立ち上がる。埋土は黄色ブロックを含む灰茶色土であった。規模は長軸約1.5m、短軸約1.3m、検出面からの深さは約50cmであった。

遺物は土師器環や甕の破片が出土したが、図示可能なものはなかった。



第15図 B区土坑実測図 (1/40)

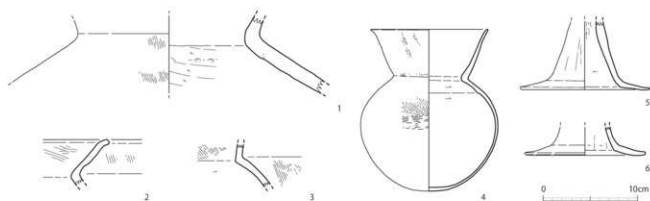
3号土坑 (第15図 図版5)

調査区の南端付近で確認された。平面形は五角形を呈し、西側が三角形状に突出する。床面は二段で、1段目は水平、二段目は東側がやや深くなっており、元々は2基の土坑であったと考えられる。壁は急角度で立ち上がる。埋土は黄色ブロックを含む灰茶色土であった。規模は長軸約1.4m、短軸約1.2m、検出面からの深さは1段目が約15cm、二段目が約45～50cmであった。

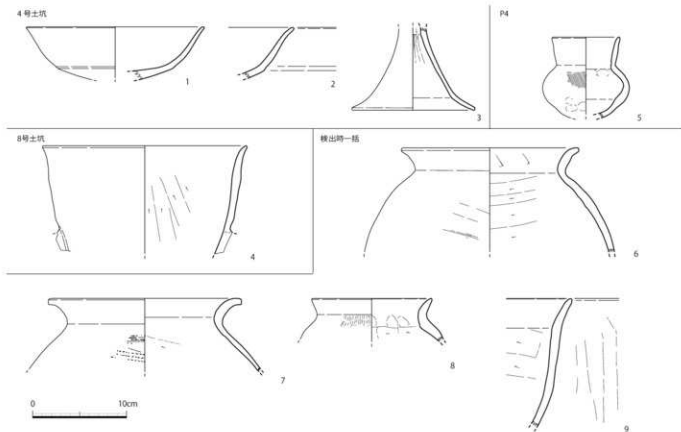
遺物は出土しなかった。

4号土坑 (第15図 図版5)

調査区の中央付近で確認され、西側以外の大部分は削平を受けている。平面形は円形もしくは楕円形を呈する



第16図 B区3号竪穴建物出土遺物実測図(1/4)



第17図 B区その他の出土遺物実測図(1/4)

と思われる。床面は東側へ向かって傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物を含む灰褐色土であった。規模は東西軸約0.5m + a、検出面からの深さは約15cmであった。

遺物は土師器高坏のほか、甕の破片が出土している(第17図1～3)。

5号土坑(第15図 図版5)

調査区の南東端で確認され、東側は調査区外へ広がる。平面形は楕円形を呈するものと思われる。床面は平坦ではほぼ水平で、壁は急角度で立ち上がる。埋土は黄色ブロック・炭を含む暗灰色土であった。調査区内で確認された規模は長軸約1.7m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約15～20cmであった。

遺物は弥生土器甕が出土したが、図示可能なものはなかった。

6号土坑 (第15図)

調査区中央の西壁際で確認され、西側は調査区外へ広がる。平面形は不定形である。床面は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。埋土は炭化物を含む淡黄灰色土であった。調査区内で確認された規模は、西壁際で約2.4m、東西方向約0.5m、検出面からの深さは約20cmであった。

遺物は土師器片が出土したが、図示可能なものはなかった。

7号土坑 (第15図 図版6)

1号土坑の南側で確認され、これに切られる。平面形は溝状を呈する。床面は東側へ傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物を少量含む暗灰色砂質土であった。規模は南北軸約1.6m+a、東西軸約0.7m、検出面からの深さは約10cmであった。

遺物は土師器片が出土したが、図示可能なものはなかった。

8号土坑 (第15図 図版6)

2号土坑の南東側で確認され、これに切られる。平面形は正方形を呈する。床面はほぼ平坦で西側にピット状の掘り込みがある。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物を含む淡黄茶色土であった。規模は南北軸・東西軸とも約0.9m、検出面からの深さは約15cmであった。

遺物は土師器瓶が出土した(第17図4)。

4. 出土遺物 (第16・17図 図版8)

B区での出土遺物は、3号竪穴建物、4号土坑、8号土坑、P4から遺構の時期を決定できる土師器が出土している。詳細については第2表を参照されたい。

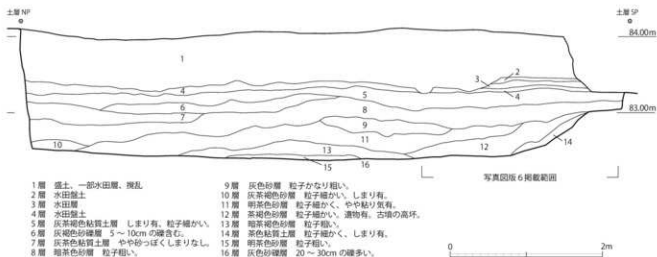
(4) C区の遺構と遺物 (第18～20図 図版6・8)

C区では、建物や土坑などの明確な遺構は確認されなかった。検出面の状況は、北側へ向かって緩やかに下がっている状況であった。中央付近で、トレンチを調査区北側の東壁部分に設定し、掘り下げを行った結果、調査区中央付近から北側へ向かって40～50cm落ち込んでいる状況が確認された。こうした状況からこの落ち込みは自然流路と判断した。また、流路の埋土については粘質土や砂礫・砂が交互に堆積している状況が確認された。

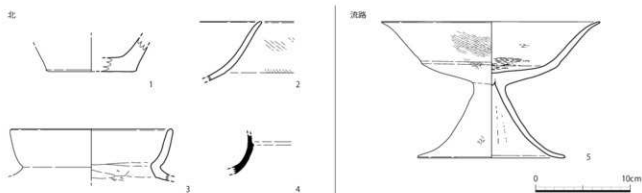
なお、遺物は検出時に調査区北側、自然流路の埋土(6～15層中)から、弥生土器甕や土師器甕・高環が出土している。(第20図)



第18図 C区全体図 (1/150)



第19図 C区東壁土層実測図(1/50)



第20図 C区出土遺物実測図(1/4)

IV 総括

前章までに今回の調査で確認された遺構・遺物について述べてきたが、最後にこれらの遺構の時期¹⁰⁾や、遺跡の性格について考えてみたい。

まず、A区では1号竪穴建物から良好な一括資料が出土している。このうち、第9図1は後期3～4期、8は後期4～5期、第10図4の高坏は後期4期に位置づけられる。5号竪穴建物の甕は後期4期(同図2・4)に比定できる。また、4号竪穴建物の土師器甕(第11図1)はIV～V期に位置付けられる。

この他の建物に関しては、明確な時期比定する根拠に乏しいが、切り合い関係から若干の前後関係はあるであろうが、弥生時代の竪穴建物(1・3・5～7号)は、やや古い時期の土器があるものの、概ね後期4期から5期、弥生時代後期後半と考えたい。また、4号竪穴建物とこれを切る2号竪穴建物は古墳時代後期のものであろう。

その他の遺構に関しては、溝状遺構から弥生土器甕や土師器碗が出土しているが、遺構の時期を決定付けるには根拠に乏しい。また、攪乱からではあるが、TK43期に相当する須恵器坏身(第11図15)があり、2次調査の調査結果¹¹⁾と合わせて考えれば、この付近にも周辺に古墳時代後期の集落が存在していたことが想定される。

次にB区では、3号竪穴建物出土の甕(第16図4)がⅢB期、高坏脚部(同図5・6)はⅢB期からⅣ期の特徴がみられ、古墳時代中期前半から中頃と考えられる。また、4号土坑出土の高坏(第17図1～3)はⅢB期からⅣ期、P4出土の甕(同図4)はⅢB期、8号土坑出土の甕もカマド出現期以降のものであるので¹²⁾、これらの遺構はいずれも、竪穴建物とほぼ同時期の古墳時代中期前半から中頃に取まるものと考えられる。

C区の流路出土の土師器高環（第20図5）はIV期に相当するものであり、B区で確認されている集落の時期とほぼ一致する

以上、今回確認された遺構の時期について検討してきたが、最後にこの集落が営まれた時期とその立地との関係について考えてみたい。

今回の調査で確認された集落の時期のうち、弥生時代後期後半が1次調査で確認された時期と部分的に重なり、古墳時代中期前半から中頃が2次調査で確認された時期とほぼ重なる¹⁰。このことから本遺跡で集落が営まれた時期は、3回の調査で確認された弥生時代後期から古墳時代後期の間に取まり、その間、河川の氾濫を避けながら時期ごとに移動を繰り返し、集落を営んだと考えられる。本遺跡の1・2次調査の報告でも指摘されているが¹⁰、こうした河川の氾濫が繰り返される中で古墳時代中期以降、土地が安定し、後期まで集落が営まれるようになったと考えられる。

また、今回の調査地から東に約100mに南北方向に流れる水路がある。第1図に矢印を示しているが、水路は南北方向へそれぞれ流れていることから、二重丸印の位置付近がこの一帯では高い場所になっていることが分かる。よって、今回の調査で確認された集落もこの微高地一帯に含まれ、C区で確認された自然流路との位置関係から、B区とC区の間集落がある微高地と流路のある低地との境界が存在していると考えられる。

註

(1) 各遺物の時期については、次を参考にした。

弥生土器：渡邊隆行編『吹上Ⅵ—自然科学分析調査の記録・調査の総括—』日田市埋蔵文化財調査報告書第112集
（市内遺跡発掘調査報告13）日田市教育委員会 2014

土師器：重藤舞行『筑前・筑後の須恵器出現以後の土器』山口県の古墳時代土器編年を考える』山口県考古学フォーラム 2008

重藤舞行『北部九州における古墳時代中期の土師器編年』『古文化談義』第63集九州古文化研究会 2010

須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

(2) 渡邊隆行・矢羽田幸弘『一丁田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第68集 日田市教育委員会 2006

渡邊隆行編『一丁田遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第83集 日田市教育委員会 2008

(3) 若杉竜太『豊後・日田地方における古墳時代中期の一様相』『先史学・考古学論究』Ⅴ 龍田考古会 2010

若杉竜太『求来里の遺跡Ⅱ 金田遺跡の調査』日田市埋蔵文化財調査報告書第89集 日田市教育委員会 2009

第1表 出土土器観察表（1）

| 標記番号 | 遺構名 | 種別 | 形状 | 法 量 | | | | 調 査 | | 土 質 | 産 地 | 色 調 | | | | 備 考 |
|-------|------|------|----|--------|--------|-----|--------|------------------|------------------|---------|-----|--------|----------|--------|----------|------------------|
| | | | | 口径 | 器口径 | 底径 | 器高 | 内面 | 外面 | | | 内面 | 底 | 外面 | 底 | |
| 第901区 | A-1型 | 弥生土器 | 壺 | 22.4 | 27.2 | 6.3 | 42.0 | ココナダ・ハケ目・ナダ・器オサエ | ココナダ・ハケ目・ナダ・器オサエ | A・C・D | 良 | にぶい黄褐色 | 1008/3 | にぶい黄褐色 | 1008/3 | 外面に磨粒にスス付着 |
| 第902区 | A-1型 | 弥生土器 | 壺 | (22.4) | - | - | 30.4 | ココナダ・ハケ目 | ココナダ・ハケ目・ナダ・ナダ目 | A・C・E | 良 | にぶい褐色 | 7.5087/4 | にぶい褐色 | 7.5087/4 | 内外面に磨粒あり |
| 第903区 | A-1型 | 弥生土器 | 壺 | - | - | - | 36.3 | ハケ目 | ココナダ・ハケ目 | A・C・D | 良 | 淡黄褐色 | 7.5088/3 | にぶい褐色 | 7.5087/3 | 外面にスス付着 |
| 第904区 | A-1型 | 弥生土器 | 壺 | - | - | 6.9 | (12.8) | ナダ | ハケ目・ナダ | A・B・E | 良 | にぶい黄褐色 | 10087/3 | にぶい褐色 | 7.5087/4 | 内外面にスス付着 |
| 第905区 | A-1型 | 弥生土器 | 壺 | - | - | 6.9 | (11.9) | ハケ目・ナダ | ナダ | A・C・E | 良 | にぶい黄褐色 | 10087/3 | にぶい褐色 | 7.5086/4 | 内外面にスス付着 |
| 第906区 | A-1型 | 弥生土器 | 壺 | 22.0 | 41.2 | 7.1 | (41.6) | ハケ目・ナダ・器オサエ | ココナダ・ハケ目・ナダ | C・D・F | 良 | 灰白色 | 10088/2 | 灰白色 | 10088/2 | 外面に磨粒あり 器口行き先 |
| 第907区 | A-1型 | 弥生土器 | 壺 | - | (24.8) | 3.6 | (27.5) | ナダ・器オサエ・磨粒のため不明 | ナダ・ナダ目・磨粒のため不明 | B・B・E | 良 | 灰黄褐色 | 10086/2 | にぶい黄褐色 | 10087/4 | 外面に磨粒あり |
| 第908区 | A-1型 | 弥生土器 | 壺 | 9.9 | 19.4 | 4.4 | (21.8) | ハケ目・ナダ・器オサエ | ココナダ・ナダ目・ハケ目・ナダ | A・C・D・E | 良 | にぶい褐色 | 7.5087/4 | にぶい褐色 | 7.5087/4 | 外面に磨粒あり 器口行き先 |
| 第909区 | A-1型 | 弥生土器 | 壺 | (16.4) | - | - | (11.5) | ココナダ・ハケ目・ナダ・器オサエ | ココナダ・ハケ目・ナダ | A・C・D | 良 | 灰白色 | 10088/2 | 灰白色 | 10088/2 | |
| 第910区 | A-1型 | 弥生土器 | 壺 | - | - | - | 36.4 | ココナダ・ハケ目・ナダ・器オサエ | ココナダ・ハケ目 | C・D・E | 良 | 灰白色 | 10088/2 | 灰白色 | 10088/2 | |

第2表 出土土器観察表(2)

| 標記 番号 | 遺構名 | 種類 | 器種 | 規 格 | | | 内 容 | | 土 質 | 産 地 | 色 調 | | | | 備 考 | | |
|----------|---------|------|------|--------|--------|----|--------|----------------------|----------------------|-----------------|-----------|--------|--------|---------|---------|----------|--------------------|
| | | | | 口径 | 胴径 | 底径 | 内面 | 外面 | | | 内面 | Ror | 外面 | Ror | | | |
| 第100回 | A-1型 | 粘土土器 | 壺 | - | (18.0) | - | (14.0) | ハケ目・磨粒のため不明瞭 | ハケ目・磨粒のため不明瞭 | B・E・E・G | 真 | 灰黄褐色 | 10Y5/2 | 明赤褐色 | 2.0Y5/3 | | |
| 第101回 | A-1型 | 粘土土器 | 鉢 | 27.6 | - | - | 18.5 | ヨコナダ・ハケ目・ナダ・磨粒のため不明瞭 | ヨコナダ・ハケ目・ナダ | A・B・D | 真 | 浅黄褐色 | 10Y6/3 | 浅黄褐色 | 10Y6/3 | 内外面に黒炭あり | |
| 第102回 | A-1型 | 粘土土器 | 鉢 | - | - | - | 19.5 | ナダ・磨粒のため不明瞭 | ハケ目・磨粒のため不明瞭 | A・C・E | 真 | 浅黄褐色 | 10Y6/3 | 灰黄褐色 | 10Y5/2 | | |
| 第103回 | A-1型 | 粘土土器 | 高坏形鉢 | (25.0) | - | - | (4.0) | ミダケナダ | ヨコナダ・ハケ目・ナダ | A・B | 真 | 灰黄褐色 | 10Y6/2 | 浅黄褐色 | 10Y6/3 | | |
| 第110回 | A-4型 | 土師器 | 壺 | (19.0) | - | - | (8.1) | ヨコナダ・磨粒のため不明瞭 | ヨコナダ・ナダ | A・C・E | 真 | じい・黄褐色 | 10Y7/3 | じい・黄褐色 | 10Y7/3 | | |
| 第112回 | A-5型 | 粘土土器 | 壺 | (21.0) | (25.0) | - | (20.0) | ヨコナダ・ハケ目・ナダ | ヨコナダ・ハケ目・ナダ | A・C・E | 真 | じい・黄褐色 | 10Y7/4 | 灰褐色 | 2.0Y4/2 | | |
| 第113回 | A-5型 | 粘土土器 | 壺 | - | - | - | (3.0) | ハケ目・ナダ | ヨコナダ・ハケ目・ナダ・磨粒のため不明瞭 | A・C・D・E | 真 | じい・黄褐色 | 10Y7/3 | じい・黄褐色 | 10Y7/3 | | |
| 第113回 | A-5型 | 粘土土器 | 壺 | - | - | - | 6.4 | (10.3) | ナダ・磨粒のため不明瞭 | ナダ | A・C・E | 真 | 灰黄褐色 | 10Y6/2 | 褐色 | 2.0Y7/6 | |
| 第115回 | A-5型 | 粘土土器 | 壺 | - | - | - | (10.0) | - | ハケ目 | ハケ目・ナダ | A・B・E・G | 真 | じい・黄褐色 | 10Y7/3 | じい・褐色 | 2.0Y7/4 | |
| 第116回 | A-7型 | 粘土土器 | 壺 | - | - | - | (5.0) | - | ナダ・磨粒のため不明瞭 | ナダ・磨粒のため不明瞭 | A・C・D・E | 真 | じい・黄褐色 | 10Y7/3 | じい・黄褐色 | 10Y7/3 | |
| 第117回 | A-1型 | 粘土土器 | 壺 | - | - | - | (3.0) | - | ヨコナダ | ヨコナダ・ハケ目・ナダ | A・C・D・E | 真 | 浅黄褐色 | 2.0Y6/3 | 浅黄褐色 | 2.0Y6/3 | |
| 第118回 | A-1型 | 土師器 | 碗 | (14.2) | - | - | (4.0) | - | ナダ・磨粒のため不明瞭 | ナダ・磨粒のため不明瞭 | A・D・E | 真 | 褐色 | 2.0Y6/6 | 褐色 | 2.0Y6/6 | 底部あり |
| 第119回 | A-2型 | 粘土土器 | 壺 | - | - | - | (5.0) | - | ヨコナダ | ヨコナダ・ナダ | A・E | 真 | 浅黄褐色 | 2.0Y6/3 | 浅黄褐色 | 2.0Y6/3 | |
| 第120回 | A | 粘土土器 | 壺 | - | - | - | (8.0) | - | ヨコナダ・ナダ・磨粒のため不明瞭 | ヨコナダ・ハケ目・ナダ | A・E | 真 | 浅黄褐色 | 10Y6/3 | 灰褐色 | 2.0Y5/2 | |
| 第120回 | A | 粘土土器 | 高坏 | - | - | - | (4.0) | - | 磨粒のため不明瞭 | 磨粒のため不明瞭 | D・E・G | 真 | 褐色 | 10Y7/6 | 黄褐色 | 10Y7/6 | |
| 第121回 | A-6型 | 粘土土器 | 壺 | - | - | - | (8.2) | - | ハケ目 | ヨコナダ・ハケ目 | A・C・E | 真 | 灰黄褐色 | 10Y6/2 | じい・黄褐色 | 10Y5/3 | |
| 第122回 | A-6型 | 灰褐色 | 片身 | (11.0) | - | - | (2.0) | - | 回転ナダ | 回転ナダ | E | 真 | 灰白色 | X7/ | 灰白色 | X5/ | 受け皿径12.85cm |
| 第140回 | B-2型 | 土師器 | 壺 | - | - | - | (8.2) | - | ナダ・ナダ | ハケ目・ナダ | A・D・E | 真 | 浅黄褐色 | 10Y6/3 | じい・黄褐色 | 10Y7/2 | |
| 第142回 | B-2型 | 土師器 | 壺 | - | - | - | (4.0) | - | ヨコナダ・ハケ目・ナダ | ヨコナダ・ハケ目・ナダ | A・C・D・E | 真 | じい・黄褐色 | 10Y7/3 | じい・黄褐色 | 10Y7/3 | |
| 第143回 | B-2型 | 土師器 | 壺 | - | - | - | (4.0) | - | ハケ目・ナダ | ヨコナダ・ハケ目 | A・C・E | 真 | 褐色 | 2.0Y6/2 | じい・褐色 | 2.0Y6/4 | |
| 第144回 | B-2型 | 土師器 | 壺 | 12.4 | 14.5 | - | 17.0 | - | ナダ・ナダ・磨粒のため不明瞭 | ハケ目・ナダ・磨粒のため不明瞭 | A・C・D・E | 真 | じい・褐色 | 10Y7/4 | じい・褐色 | 10Y7/4 | |
| 第145回 | B-2型 | 土師器 | 高坏形鉢 | - | - | - | 13.7 | (7.2) | ナダ・磨粒のため不明瞭 | ナダ・磨粒のため不明瞭 | A・B・D・E・G | 真 | 浅黄褐色 | 2.0Y6/6 | 褐色 | 10Y7/6 | 底面に黒炭あり |
| 第146回 | B-2型・4上 | 土師器 | 高坏形鉢 | - | - | - | 12.8 | (3.0) | ナダ・磨粒のため不明瞭 | 磨粒のため不明瞭 | A・C・E | 真 | じい・褐色 | 2.0Y7/6 | じい・褐色 | 2.0Y7/4 | |
| 第170回 | B-4上 | 土師器 | 高坏形鉢 | (19.0) | - | - | (5.0) | - | 磨粒のため不明瞭 | 磨粒のため不明瞭 | B・D・G | 真 | 褐色 | 2.0Y7/6 | 褐色 | 2.0Y7/6 | |
| 第172回 | B-4上 | 土師器 | 高坏 | - | - | - | (5.0) | - | ヨコナダ | ヨコナダ・ナダ | A・C・E | 真 | じい・褐色 | 2.0Y7/3 | じい・褐色 | 2.0Y6/3 | |
| 第173回 | B-4上 | 土師器 | 高坏形鉢 | - | - | - | 13.0 | (8.2) | ナダ・シボ目 | 磨粒のため不明瞭 | B・D・G | 真 | 褐色 | 2.0Y7/6 | 褐色 | 2.0Y7/6 | |
| 第173回 | B-4上 | 土師器 | 碗 | (11.4) | - | - | (11.0) | - | ヨコナダ・ナダ | ヨコナダ・ナダ | A・C・D・E | 真 | 褐色 | 10Y6/6 | じい・褐色 | 10Y6/3 | |
| 第173回 | B-4上 | 土師器 | 壺 | (7.0) | (9.2) | - | (8.0) | - | ナダ・磨粒のため不明瞭 | ハケ目・ナダ・磨粒のため不明瞭 | A・B・E | 真 | じい・黄褐色 | 10Y6/3 | じい・黄褐色 | 10Y6/3 | 内外面に黒炭あり |
| 第173回 | B-4焼出時 | 土師器 | 壺 | 18.5 | - | - | (11.0) | - | ヨコナダ・ナダ | ヨコナダ・ナダ | A・C・D・E | 真 | じい・黄褐色 | 10Y7/2 | 浅黄褐色 | 2.0Y6/4 | 表面に黒炭付着 内面に黒炭あり |
| 第173回 | B-4焼出時 | 土師器 | 壺 | (20.0) | - | - | (7.0) | - | ナダ・磨粒のため不明瞭 | ヨコナダ・ナダ | A・B・E | 真 | 明赤褐色 | 2.0Y6/9 | 明赤褐色 | 2.0Y6/9 | |
| 第173回 | B-4焼出時 | 土師器 | 壺 | (12.7) | - | - | (4.0) | - | ヨコナダ・ナダ・磨粒のため不明瞭 | ヨコナダ・ハケ目・ナダ | A・C・E | 真 | じい・褐色 | 2.0Y7/4 | 灰褐色 | 2.0Y6/2 | |
| 第173回 | B-4焼出時 | 土師器 | 碗 | - | - | - | (11.0) | - | ヨコナダ・ナダ | ヨコナダ・ナダ | A・D・E | 真 | 明赤褐色 | 2.0Y6/9 | 褐色 | 10Y7/6 | |
| 第200回 | C-2 | 粘土土器 | 壺 | - | - | - | (8.0) | - | ナダ | ナダ | A・D・E | 真 | 浅黄褐色 | 2.0Y6/4 | じい・褐色 | 2.0Y6/4 | |
| 第200回 | C-2 | 粘土土器 | 高坏 | - | - | - | (6.2) | - | ヨコナダ・ナダ | ヨコナダ・ハケ目・ナダ | A・E | 真 | 浅黄褐色 | 2.0Y6/4 | 浅黄褐色 | 2.0Y6/4 | |
| 第200回 | C-2 | 土師器 | 壺 | (12.0) | - | - | (5.0) | - | ヨコナダ・ナダ | ヨコナダ | A・C | 真 | 褐色 | 2.0Y6/3 | 褐色 | 2.0Y4/3 | |
| 第200回 | C-2 | 灰褐色 | 壺 | - | - | - | (4.1) | - | 回転ナダ | 回転ナダ | E | 真 | 灰白色 | X7/ | 灰白色 | X5/ | |
| 第200回 | C-2 | 灰褐色 | 高坏 | (23.1) | - | - | 15.6 | (4.3) | ハケ目・ナダ | ハケ目・ナダ | B・C | 真 | 褐色 | 2.0Y7/6 | 褐色 | 2.0Y7/6 | 表面に黒炭あり |

出度の単位はcm。○ 磨き足、焼付と炭末を付す。

記上：A 角形器 B 高 尺 C 高 尺 D 赤褐色 E 白色磁子 F 褐色磁子 G 磨得 110度

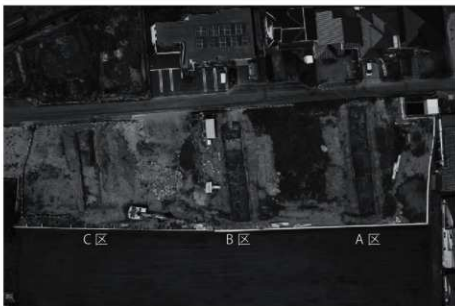
調査地周辺空中写真（南から）
白丸が調査地、北側に花月川が流れている。



調査地全体写真（南東から）



調査区垂直写真（上が北）





A区全景（北東から）



A区1号竪穴建物完掘状況（南西から）



A区1号竪穴建物完掘状況（南東から）



A区1号竪穴建物遺物出土状況



A区6号竪穴建物発掘状況（北東から）



A区5号竪穴建物完掘状況（南東から）



A区5号竪穴建物遺物出土状況



A区2・4号竪穴建物完掘状況(南から)



A区3号竪穴建物完掘状況(東から)



A区7号竪穴建物完掘状況(南から)



A区1号溝状遺構完掘状況(東から)



A区2号溝状遺構完掘状況(東から)



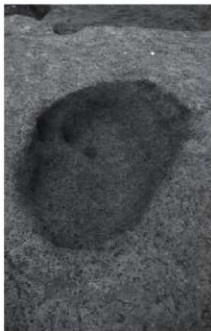
A区1号溝状遺構土層堆積、遺物出土状況



A区2号溝状遺構土層堆積状況



A区1号土坑完掘状況(南から)



A区2号土坑完掘状況(南から)



A区3号土坑完掘状況(北等から)



B区全景(北東から)



B区1号竪穴建物発掘状況(北西から)



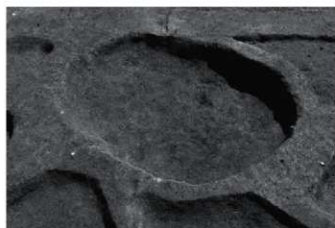
B区1号竪穴建物カマド発掘状況(北西から)



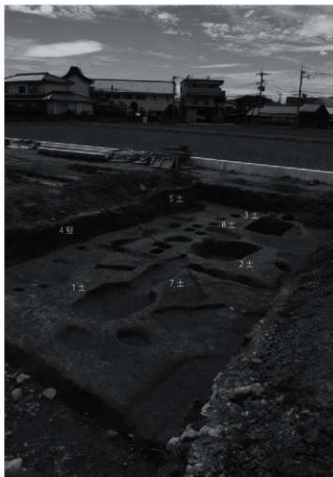
B区2号竪穴建物完掘状況(北東から)



B区3号竪穴建物状況(北東から)



B区1号土坑完掘状況(北東から)



B区南側竪穴建物・土坑発掘状況(北西から)



B区2号土坑完掘状況(北東から)



B区3号土坑完掘状況(北東から)



B区4号土坑完掘状況(南東から)



B区5号土坑完掘状況(南東から)



B区7号土坑完掘状況(南東から)



B区8号土坑完掘状況(北東から)



C区全景(南西から)



C区トレンチ発掘状況(南西から)



C区東壁土層堆積状況①



C区東壁土層堆積状況②





報告書抄録

| | |
|--------|----------------------|
| ふりがな | いっちょうだいせき3じ |
| 書名 | 一丁田遺跡3次 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 日田市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第129集 |
| 編著者名 | 若杉 竜太 |
| 編集機関 | 日田市教育庁文化財保護課 |
| 所在地 | 〒877-8601 日田市田島2-6-1 |
| 発行機関 | 日田市教育委員会 |
| 所在地 | 〒877-8601 日田市田島2-6-1 |
| 発行年月日 | 2017年3月31日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 発掘期間 | 発掘面積 | 調査原因 |
|---------|------------|---------|--------|-------------|-------------|---------------------------|--|--------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 一丁田遺跡3次 | 大分県日田市丸の内町 | 44204-6 | 651258 | 33° 19' 37" | 130° 56' 0" | 20150616 ～ 20150731 | 315 m ² A区 121 m ² B区 107 m ² C区 87 m ² | 記録保存調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---------|----|--------------|-------------------------------|----------------------|------|
| 一丁田遺跡3次 | 集落 | 弥生時代 古墳時代 | 竪穴建物 11、溝状遺構 2 土坑 11、ピット多数 | 弥生土器、土師器 須恵器、鉄鏝、銭 | |

| | |
|----|--|
| 要約 | <p>遺跡は日田盆地の北部を流れる花月川左岸の沖積微高地に広がる。調査では弥生時代後期後半、古墳時代中期前半から中頃の集落や自然流路が確認された。今回の調査地を含め本遺跡一帯は河川の氾濫原にあることから、地形的な制約を受けながら、弥生時代後期以降、時期ごとに移動を繰り返しながら集落を営んでいたが、古墳時代中期以降は土地が安定し、後期まで集落が再び営まれるようになったと考えられる。</p> <p>また、調査地東側を流れる水路の方向から、調査地一帯における微高地の広がりを想定でき、調査地の西側で確認された自然流路との位置関係から、今回の調査地に微高地と流路のある低地との境界が存在していることが確認できた。</p> |
|----|--|

一丁田遺跡 3次

日田市埋蔵文化財調査報告書第 129 集

2017 年 3 月 31 日

編集 日田市教育庁 文化財保護課
877-8601 大分県日田市田島 2-6-1

発行 日田市教育委員会
877-8601 大分県日田市田島 2-6-1

印刷 カワハラ企画
877-1365 大分県日田市水目町 315-4



日田市

